

磐城守山附近風土雜記

菅谷泰昌

昨秋私達は東北本線郡山から同須賀川驛以東の守山町谷田川村(參謀本部の地圖郡山須賀川の中)の間にかけて少々飛び廻りまして其中思ひ付いた事や聞いた事を書付けました、以下夫れを羅列して見ませう。お羞しいものではありませんが、

○氣 候

守山、谷田川等に於て氣象天候の記録なく今福島縣第四十回統計書に依りて大正十一年の統計を得て其大凡を知るの料とせん、

| 月別 | 雨量 | | 風 | |
|----|------|-------|-----|--------|
| | 總量 | 最多量日數 | 平速度 | 最多暴風日數 |
| 一月 | 三元八 | 七八 | 四六 | 西北西 七 |
| 二月 | 一四・七 | 五〇・六 | 三四 | 北 東 八 |
| 三月 | 三三・三 | 四一・七 | 四二 | 西北西 一〇 |
| 四月 | 六六・六 | 五五・三 | 三七 | 北 東 六 |
| 五月 | 六六・六 | 三三・四 | 三一 | 北 東 一 |
| 六月 | 三三・八 | 三三・七 | 二六 | 北 東 二 |

磐城守山附近風土雜記

| | | | | |
|--------|---------|------|-----|-------------|
| 七月 | 六五・三 | 一八 | 二三 | 南 西 三 |
| 八月 | 一五二・二 | 五八・六 | 二二 | 一、九 南 西 一 |
| 九月 | 二六八・八 | 三九・七 | 二七 | 二、七 北 東 二 |
| 十月 | 二三六・六 | 三三・九 | 九 | 二、〇 南 西 一 |
| 十一月 | 八五・五 | 八・二 | 二五 | 二、七 西 北 一 |
| 十二月 | 三三・七 | 八・二 | 九 | 三、五 西 北 西 七 |
| 合計又ハ最多 | 一、〇七五・五 | 八二・六 | 一七三 | 三、一 北 西 一 |

氣温は谷田川村役場に於ける記録によれば最高華氏九十度内
外(八月)最低華氏三十一、二度(二月)と云へり

又田村郷土史に擧げられたる明治三十三年の結果は最高(八月)百二度最低(二月)二十八度なり

○聚落の形式及地質

此地方は一體に聚落は散行の形式を齎り偶に聚落せる部落は街村の形式を成すも戸數僅少にして一見寂莫の感あり去れば住民共同の念に欠けたりと云はる。

此邊の藁屋の屋根のタイプは圖の如し。

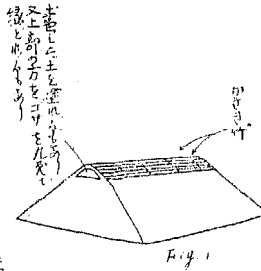


Fig. 1

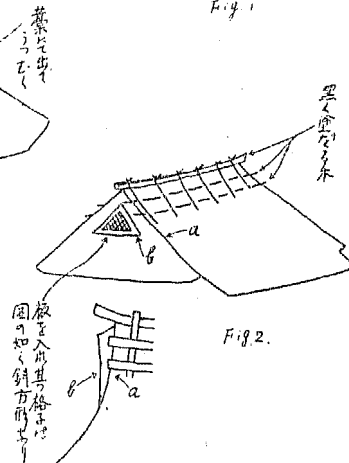


Fig. 2

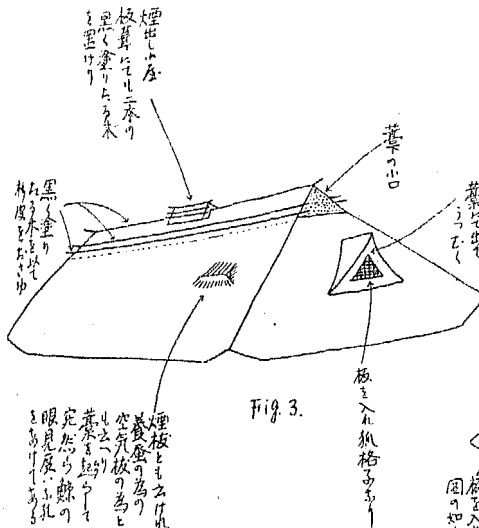


Fig. 3

第一圖のタイプは、東京附近を初めとして、常磐線の沿線及び小山線信越線は高崎邊まで、或は東北線は郡山、日和田、本宮邊まで分布してゐる、此の間全部が此のタイプ許りだとは云はない勿論變つたのもある中に散在する意味である。郡山市郊外は先づ第一圖のタイプを以て、スタンダードとして可なりである。

第二圖は笹川附近の資産家らしい家に用ひられてゐる。勿論貧乏な家は第一圖の屋根を葺いてゐる、守山町字守山邊も第一圖と第二圖のタイプを交互に用ひられてゐる。

守山町字山中には第三圖の様なのがあつた、此の家も勿論資産家の家である。

此處で目立つのは棟の横に並べる木が棟の巾より飛出してゐることである。

ちよつと面白く感じられる。又、此の地方はおしなべて屋根のスロープがのろい。

そして、皆寄棟作のタイプである。又第二圖第三圖の如きタイプの屋根の家は、棟木を外から見へる様に屋作りがしてゐるのが又大變目立つ。

谷田川村も第一、第二のタイプを交互に用ひられてゐる。

此地方の地質は大凡花崗岩質と火山灰との質の二傾向交々々雑するも谷田川、守山、郡山、等に於ては概ね花崗岩質にして外見は赤黒く又は褐色を呈し或は砂地あり粘土ありて一定ならず、守山町の西部に少し火山灰質を見るのみなり。守山町岩岩作と谷田川村との界に(國道附近の)丘陵ありて其處より土器石器の類多く出づ多く蒐集して谷田川小學校に保存されたり、又此の岩作より石材を産出す、俗に山崎と稱するものにして百二、三十年前の墓碑尙風化の痕を見ず工事材料として適するものなりん。其産額現在少量なるも埋藏量は甚大なるもの、如し。

○此地方には菅船明神と稱するものを祭祀する神社多し。相生記曰菅船明神者猿田彦太神也、

○人口其他に就いて

守山町大字守山の一戸當りの人口九、一人、谷田川村字谷田川の一戸當り人口七、〇人等は少々、數の大に失する傾あると危まれるも此地方は凡て一戸當りの人口多きは疑ひなき事實にして福島縣第四十回統計書に依りても田村郡の各村のみにて最大、逢隈村の八、五五人、最少、山根村の五、二〇人、田村郡の平均は六、四〇人なるを見ても知る可きなり、

一戸當りの人口の多少は如何なることに原因するものか、余輩の推察に苦む所知らまほしき所なり。

郡山市發展に比例して守山町附近の住民は郡山に吸收されて移住するもの多し。

將來も此傾向益々顯著なるならん。

磐城守山附近風土雜記

此邊住民の移住経路に就いては姓氏考に於て管見を述べたり。

○頬赤き宿の蕪蓋かみて我に澁茶を勧めけるかも、此は或男の詠なれど上州から此邊にかけて以北の女の頬の赤いのは目立てり。

又輪廓が少々中國邊の女より立體的即ち彫刻的なり。

○言語も多く集めたれど、仲々みやびやかなるもの、殘れるあり。

民謡と云はうか俗謡と云はうか、此の勢力範圍は、何と云ふても朴訥な口調の「おばこ節に屬し次いで新津節會津節等も少々の潜勢力を有しぬ。

○三朝四暮

此の地方に於て婚禮の時盃の献酬毎に三朝四暮と云ふ歌を諷ふ、東奥特有の俗曲にして古樣趣味あるものなり

處によりては總て男より盃を進むる時は謡曲の高砂老松等を諷ひ女より進むるときは三朝四暮を諷ふの例もあり。

簪に盃を進めて二献酌みしき。

三朝四暮か、かやの、雨か、音もせて来て

濡れかゝる生涯しよがいのなり。

同三献と成りし時

これの座敷は目出度い座敷

四ツの隅から金が湧く生涯しよがいのなり。

嫁に盃を渡し三献となりし時

これのおかまの、かきだれみたか、

黄金こつぶが、成り下る、しやうがいな。

同三献の時

簪は百まで嫁九十九迄

共に白髪を生へる迄生涯な。

父親に盃を進めし時嫁方にて

雄のめんざり小松のもとに

妻を呼ぶやら、ちよくこ、生涯な。

父親盃を受けて二献の時

これの御庭に。よしこを植えて

およめこよめの、あひのよし生涯な。

母親に盃を向ける時

これのかゝさん、目出度いかゝさ

およめこよめに、ながよめざりて

右や左に招がるゝ、生涯な。

母親盃を受けて二献のとき

これのお背戸の、まきふじ見たか

しよしよのたからを、まきよせる生涯な。

○姓 氏 考

△福島縣田村郡守山町大字大善寺、

此處には柳沼の姓多し、

柳沼氏。——田村郡郷土吏曰

(守山町大字大善寺に東館、西館と云ふ所あり)東館と西館

と相距る僅に數町なり傳へ云ふ結城宗廣の臣國幡貞末兄弟

の居館なりと後故ありて柳沼氏を冒し歸農せり今同地に柳

沼氏を稱するものは其子孫なりと云ふ

△同上守山町大字大俣

此處には藤田。熊田の姓多し

熊田氏——攝津より出でたる熊田造、又丹波氏族にして近江

より出でたる熊田氏等は知られたり然して當地の熊田氏は

其何れにか屬するものか、未だ深く詮索の材料を見ず

藤田氏——下野那須十萬石を領せる畠山重忠の裔藤田氏を稱

してありし事あり(後嗣なく家絶ゆ)

即ち畠山氏族の藤田氏或は葛山氏族のもあり。又武藏榛澤

藤田郷より出でたる藤田氏あれど、當地の藤田氏、武藏或

は下野の餘類か。

△同上守山町大字金澤

馬場、仁井田。猪腰等の姓多し。

馬場氏——常陸の國より起れる馬場氏二族ありと云ふ

一、那珂郡馬場より起れるもの

二、久慈郡馬場より起れるもの

即ち此等の分派か。

仁井田氏——岩代國安達郡仁井田より起れるものと云へり高

倉園分氏の庶流なりと、太田氏の辭書に見えたり。

猪腰氏——所因不知

△同上守山町大字岩作

矢吹、熊田の姓多し熊田氏は大俣の項に云へり。矢吹氏の

所因不知

△同上守山町大字守山

吉田、石井、鈴木熊田の姓氏多し。

吉田氏——吉田氏は其起れる種族多し今此地方に關係あるもの、みを舉げて見ん。

一、武藏より起れる有道氏兒玉黨に族せるもの。

二、足利氏族廣澤氏より起れるもの。

三、常陸國那珂郡吉田郷より起れるもの。

四、陸奥より起れるもの、島山重忠の裔。

石井氏——

一、里見義康に仕へし人あり。

二、伊豆より出でたる武田氏族あり。

鈴木氏——此の氏族の出所は大變多きを以て此の地の該氏に似通ひたるも識別し能はず。

○守山の商人は主として郡山へ交通す昔も然らんも昔より激しからん。昔は二萬石松平氏の陣屋のありし所にて凡ての原動力貧弱乍らも把持し居たる所なれば、さもなかりしならん。又守山氏は古くは田村氏の據れる所にして此の氏族の殷盛發祥を極め地方に四十八の館を置きて諸將をして守らしめたる程なれば此等には其等の諸將の一族及期黨の裔存するなり、

以上述べたる柳沼、熊田、藤田、馬場、仁井田、猪腰、矢吹吉田、石井、鈴木等の姓氏は之等に類するものもあらずやと

是は余の管見のみ。

△同上田村郡谷田川村大字谷田川

石井、柳沼、佐久間、根本、山田、力丸、折笠の姓多し。

内、力丸、折笠は最も舊家に屬す云ふ。

石井、柳沼、の姓氏は守山の條参照のこと。

佐久間氏——太田亮氏姓氏家系辭書曰

安房國稱榎武平氏三浦氏族

和名抄曰平群狹隈郷今の佐久間村より出づ三浦義村の三男

宗村の後と云ひ又義明四男義春の嫡男佐久間家村の後とも

云ふ

即ち當地方のは此に當るか

田村郷土史曰

遠江守盛清播磨國佐久良城主たり其廿九世の孫右馬介文錄

中家を田村郡石森村に移し農に歸す佐久間府軒と云へる

三春藩の學者は其裔なりと是等の類か、

根本氏——所因不詳

山田氏——所因不詳

力丸氏——所因不詳

折笠氏——當村長折笠氏の曰く元葛西と稱せるを源朝臣頼朝

卿より折笠の姓を賜ふと。

然して葛西氏は武藏葛飾郡葛西より出づと。